

目を見張る技術革新と生産性向上

新日鐵住金君津製鐵所

4月26日、快晴に恵まれたが、富士山は霞んで見えない。総勢28が君津駅に集合し、会社のバスに乗り込んで、製鐵所の事務所に向かった。

50年前、東京ドーム約220個分の広さを埋め立てて創業。構内のレールは、山手線の2週分あるという。工場、建物が整然と並び、鉄鋼業が大装置産業であることがよく分かる。

第4高炉で世界と競争

第4高炉が見渡せるお立ち台から、高炉を見学した。現在の炉前は1チーム5名という。私が勤務を開始した八幡では、50年前であるが、確か定員14名と記憶している。現在は3倍の生産性であり、高炉の規模が4000m³と、当時の4倍であることから、概略の生産性は12倍となっているのである。製鐵所の発足時7700人であった従業員数は、途中2800名となり、現在はフル生産でもあり3500名の規模である。協力会社、工事関係者を足すと1万500名の規模である。(協力会社比率は67%)



非正規雇用は活用しておらず、正規従業員、協力会社の正社員で、運営されている。現在は女子化(目標20%)、高齢者雇用に努力中とのことであった。

韓国、ブラジル、中国に技術指導して、援助してきたが、この10年で中国が8億トンの生産能力を持つことになり、過剰生産、安値輸出の結果、日本の鉄鋼業は経営的には苦しい状況にある。原油価格、鉄鉱石、石炭の価格も落ちており、鋼材価格の下落につながっている。

安全第一と省エネ

他の製鐵所の事故のニュースが新聞等に出ることがあるが、君津製鐵所では、対策として、管理職が現場に出ることを徹底しているという。最近では、目立つ金色のルメットを付けた高齢社員が安全業務だけに従事し、厳しく、若手を指導しているという。安全に対する意識の高さは見習う点である。

コークス炉を使って、プラスチックの再利用を行うなど、省エネの努力を目の当たりにした。工場の外側には40年の努力で、大きな森ができています。

装置産業の力強さ

50年経過した設備が、技術革新を継続して現代に活躍している姿は、感激的でもある。熱延の粗圧延機を5台から3台に減らして圧延するなど、技術革新の努力が積み重なっているようだ。

見学後は、小倉広報センター長を交えて懇談会を行い、日本産業のモノづくりの強さを認識した1日であった。（森下一乗）